

雨の日は雨をききつつ
風の日には風を聞きつつ
よろこんで生きる

【第一章】富士憧憬

- 自分でやってみる 6 単純と複雑 14
読書 24 現実を愛しているか 32
自然と人間 36

【第二章】探究心と慈しみ

- 海をたたえる 48 心で話す 58
能弁か、訥弁か 62 銀座に学ぶ 68
名前について 74 心のふるさと 78
白い色のもつ心 86

【第三章】丸山敏雄への敬と愛

- 浅い親切深い親切 96 街頭にたつ父 108
父と先生 114 父の想い出 118
父の臨終（丸山敏雄伝） 122

【第四章】地球倫理の樹立

- 『世紀の歩調』の精神 140 雑草というものはない 150
人間は驕慢である 160 月への夢（ムーン・ライト・ドリーム） 166
地球の華 174 アジア丸のタゲボート 180
あとがきに代えて 188

第一章

自分でやってみる

ある日、赤塚という山にのぼった。

富士高原研修所のあるところから、八キロばかり北にのぼった富士山の中腹の、ひとつ丘山である。小型富士といった形で、海拔千三百七十四メートル、箱根の駒ガ岳よりも高いのだが、近くの御殿場登山道あたりからでも、よく注意して見ないとわからずに行きすぎてしまう。

かつてBOAC機がつらくして百二十四人が遭難したのは、この赤塚のすぐ近くだった。あるひとは、この赤塚の頂上は富士の頂上とおなじように大きくぼみがあるといった。そのむかし、富士さんとおなじように赤塚が噴火していたその名ごりというわけである。

太郎坊というところから右に林道をまわって赤塚のふもとまで自動車で来た。そしてカン木の密生しているなかを、小径にそってのぼっていった。流れる汗をふきふき、

ほどなく頂上へついた。そこらあたりをずっと歩きまわって確かめたのであるが、いがいにも窪みらしいものはなんにもないのである。スリバチ型のコニーデ式小火山とすべきだが、長い年月のあいだに、噴火のあとと埋もれてしまったのであろうか。

「おかしいなあ……たしかに池のようになっていて聞いたのだけれど……」

私は思わずつぶやいて、落ち葉のたまっている頂上の土を、一、二度強く踏んでみた。かたい。ズブズブと靴が入るような代物ではけっしてない。

「むかしは穴があいていたのでしょうか。それがいつのまにか、うもれてしまったのですね。むかしのいい伝えを、そのまま信じているひとが、いまでも噴火口があると思いきんでいるのでしょうか」

同行のF君がそういった。すかさず、つぎのようなことばが私の口をついて出たのである。

「やっぱり、自分で来て、確かめなくてはいけないのだなあ。けっきょく自分でやってみなくては、わからないのだ……」

たんなる話やいい伝えだけでは、じっさいはわからないのである。それは、そういっ

ているというだけのことだ。中国は広いといっても、行ってみなければわからない。南極のブリザードはたまらなくすごいといっても、実際に行つて、このからだで知つてみなくては、どのようにすごいかわからないのである。

これは、あたりまえのことだ。このあたりまえのことが、ほんとうは、まだよくわかつていないようにみえる。自分がやりもしないのに、もうわかったような顔をしている人たちもかなり多いのではあるまいか。

ひとつの地形でも、自分がそこに行つてみて、ナルホドと合点がいく。ひとに頼んでやつてもらうのでは、ほんとうのところはわからないように、住居の問題でも食事のことでも、すべてが、そういうものだと思うのである。

春になり、暖かさも増してくると、いつのまにか富士の裾野もみどりに変わってくる。私の寝泊まりしている小さな家のまわりは、溶岩の砂地である。そこに区画をして長方形の庭ができた。溶岩砂ではなにも生えないので、友人たちが私の居ないあいだに黒土を運んできて十五センチほどの高さで二十平方メートルくらいにわたつて、平らにならしてくれた。そこに手あたりしだいにカン木をうえつけてくれたのである。

名も知らぬその灌木は、なかにはどうとう根がつかずに枯れてしまったのもあった。あるとき、ヒマをみつけて、枯れた木をひき抜き、そのあとを耕した。親切な知人のひとりが、鶏糞をたくさん分けてくださった。五むねほど掘ったなかに、それを入れて、コマツ菜やカラシ菜などをまいたのである。秋も終わりに近づいて、朝夕の富士がいよいよよくつきりと浮かび出てくるころ、その小庭の灌木の下の畑には、小さいながらも、いつせいにそれらの芽がのび出て、すぐにグングンと伸びだしてきたのである。

春から夏にかけては、私はとくにミツバをこのんでみそ汁に入れた。いまやそれらのかわいらしい野菜類が、みそ汁の具となったのである。

それまで私は、みそ汁というものは、すぐに、かんたんにつくれるものと思つていた。しかし朝はほとんどすべて自炊しようとして、みそ汁を自分でつくつてみると、予想外にむづかしいものであることがわかった。

みそ汁を二ハイくらい飲みたいときもある。かるく一パイだけですませたいこともある。だから水の分量をいつも一定にしておきたくはない。そこで、みそをどのくら

い溶かしたらよいのか。もちろん目分量ではかるのだが、これがあんがいむつかしいということがわかったのである。

自分でつくったみそ汁の味を、こまかにしらべてみると、ほんとうにおいしいと思うときは、きわめて少ないのである。みその種類をかえると、またその分量がむつかしくなる。とってきたばかりの野菜を、水洗いしてすぐに煮えたっている汁のなかに投げ入れるのがよいのか。それとも水洗いをして、しばらく間をおいてから、あまり煮えたっていない湯のなかに入れたがよいのか。その他のやりかたもいろいろとやってみたが、それぞれ、わずかではあるが異なった味になることがわかった。

とにかくほかに仕事があるので、食事の準備は、かんたんに、手早くすませなければならぬ。するとよいけいにむつかしくなるわけで、そのコツがわかるまでには、かなりの日数を要したのであった。

いや、みそ汁よりもむつかしいのは、ごはんをたくことである。おなじ電気ガマで、器械がするのであるから、米の量と水の量とを一定にしておけば、くるいはないと思っていたら、けっしてそうではなく、こちらの心がイライラしていると、それが微妙に電気ガマに反映して、ごはんの出来ぐあいに影響してくることも、しみじみとわかったのである。

食事をつくるということは容易なことではない。それは自分でやってみたらわかる……私はつくづくとそのことを考えないわけにはゆかなかった。

へこの料理は、どのような苦心のもとにつくられたものだろうか……などと、いちいち考えているようでは、とてもおちついて食事はできないというひともある。それはそのとおりだ。しかし、ごはんひとつでもほんとうはむつかしいものだを知っているならば、「ほんとうにこのごはんはよくできている」とか「ほんとうによい味だ」とか、その味わいかたもふかくなつて、よけい楽しむことができるのである。そして食事をつくってくれたひとにたいしても、〈ありがたい〉と感謝する心の奥底に、ひとつの実感がわいてくるのである。このことを私は痛切に感ずるようになった。そして生命をやしなう食事というものは、なかなかたいへんなことなのだ、人知の総決算のひとつが、ここにも結集しているのだと、しみじみ思うようになったのである。これが実感としてそう感じられるようになったところが、私自身として尊いもの

と思うのである。

自分でやって、自分のからだで知るということは、じつに尊いことではあるまいか。山登りの爽快さといっても、自分で足をつかい、汗をながして自分でやってみて、はじめてわかるのである。つまり自分で体験してみて、ひとつひとつ身についてわかるのだ。真理とか、美とか、信仰といったようなものも、そういう意味では、けつきよく自分の体験を通しただけが把握されるのだ。一を聞いて十を知るということもあるけれども、最後はやはり自分の体験がものをいうのである。

日常生活のなかの倫理的な実践といっても、体験以外のなにものでもない。体験してみても、まちがいないとわかるし、生活の充実感も味わい知ることができるのだ。第三者的にながめたり、傍観しているだけではわからない。

ひとの話をきいていて、もっとうまく話したらいいと批評するのはやさしい。しかし自分で話してみると、からきし出来ないのである。それで自分も努力してやってみると、自分のからだで、話の妙味がすこしずつわかるようになる。

「親をたいせつにする」ということなども、〈よくわかっている〉と、ふつうは頭で考えている。そんなことはひとの子である以上は、だれでもよく知っているという。しかし、じつさいに自分がどのくらい親に喜ばれることをやっているのか、ほんとうに親を大切にしているか――。こうした点を冷静にふりかえてみたら、どうであろう。

親をすこしでも大切にただけ、親のありがたさはわかるものだと思う。頭で知っているというだけでは、自分の体験をとおしてはいないので、ほんとうはわからないのである。〈親をたいせつにすべきだ〉などとはわかっているというひとこそ、じつはすこしもわかっていないのではあるまいか。

「友情」というものも、そうだ。これも自分でほんとうに友だちに愛情をかけただけしか、わからないのではあるまいか。友人がないといつてさびしがるひともある。しかし、そういうひとは、自分自身がどれほどひとに愛情をかけてきたことがあるのか、そうした点を考えてみたことがあるのであろうか。自分が身をもってひとに愛情をかけただけが、ひとから愛情を受けたとき、しみじみとそれがわかるのではあるまいか。

そうしたことを、さまざまに思うてゆくと自分自身の体験というものが、いかに大切であるかを、ひしひしと感ずるのである。

（昭和四十二年『青年』六月号）